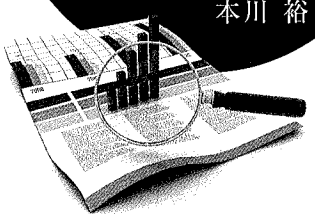
データが語る“いま”

本川 裕



第4回

誰に相談する？

悩みごとや相談ごとを、まず、誰に話しているかという点についての国際比較意識調査の結果をみてみよう。

いずれの国でも、一番多い答えは夫婦（結婚していないパートナーを含む。以下同様）であり、２番目には友人・知人だ（インドだけは２～３位が母親ないし父親と特殊）。ただし、夫婦、あるいは友人・知人と回答した人の割合では、日本人の特殊性が際立っている。

夫婦と回答した者は、日本人以外は、40%台とほぼ同じくらいの水準であるのに対して、日本人だけは60%と特別に多いのである。また、友人・知人については、インドを除くと日本人の回答率は10.4%と最低である。

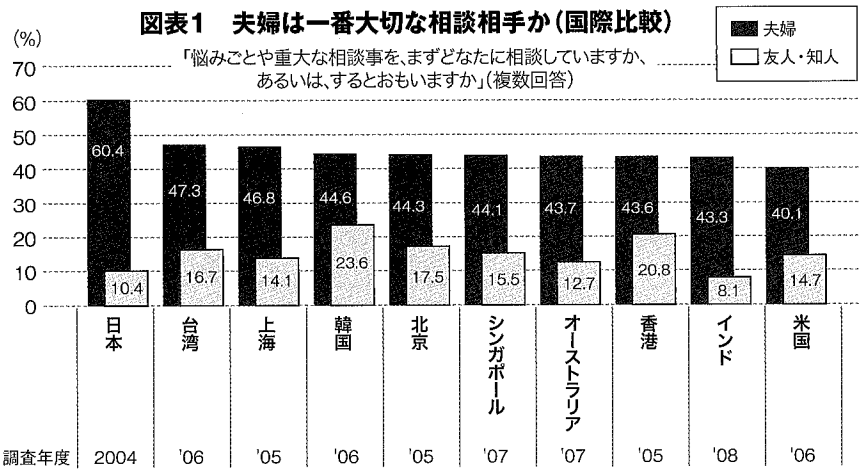
日本人は深刻な相談事をする友人があまりおらず、夫婦相互に依存するという体質が明確に見て取れる。男性の離別者・死別者の自殺率が高いのも同じ理由だろう。

こうした結果を、日本人夫婦は仲良しで好ましいと感じるか、あるいは夫婦以外の人間関係が希薄で社会の絆の強化の必要性を感じるかについては、見方が分かれるだろう。

日本以外では夫婦という回答率が40～47%とほとんど変わらないのは、ちょっと不思議な気がする。どうして友人・知人のように割合が国によって異なるパターンとなっていないのだろうか。特定の男女のカップルはサルから人間へと進化した際に子育てのために協力し合うよう相互の肉体的・精神的な結合を運命づけられた人類に共通の特別な個体間関係だからなのだろうか。そうだとしたら日本人だけが人類標準を越えて特段に夫婦が依存し合うのはなぜだろうか。

参考に、ほかの選択肢である父親、母親、きょうだいの回答率を掲げておく。父親については、いずれの国も母親やきょうだいより低い回答率である点が目立っている。母親と比べて父親が相談しにくいというのは世界共通なのだと分かる。なかでも日本は1.9%と最も低くなっており、父親との疎遠さが目立っている。日本に次いで父親の値が低いのは香港、韓国、シンガポール、台湾の順であり、やはり、儒教国における父親の近寄りがたさが表れていると思われる。なお、インド、オーストラリア、米国では、アジア諸国と比べ、母親と相談するという回答率がずっと高いという点も目立っている。

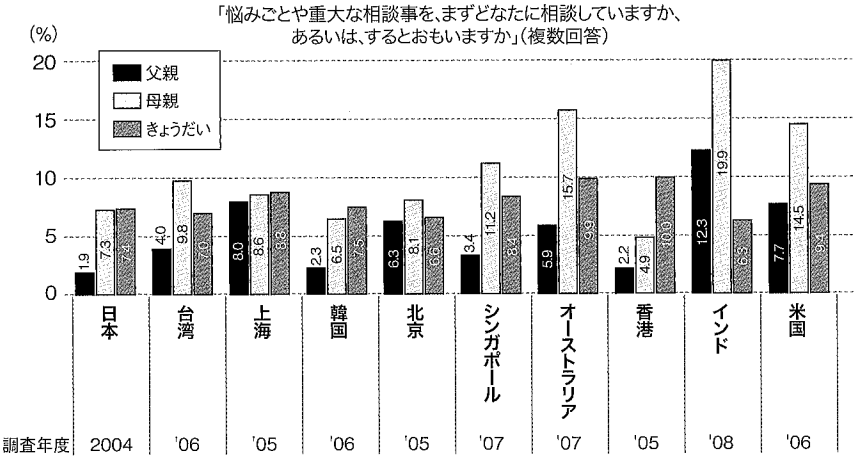
図表1　夫婦は一番大切な相談相手か（国際比較）



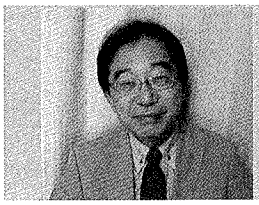
複数回答の選択肢には夫婦(配偶者やパートナー)や友人・知人の他に、父親、母親、きょうだい、親せき、その他、相談できる人はいない、特に悩みはない、などがある。
いずれの国も回答率1位は夫婦、2位は友人・知人である(インドだけは1位は夫婦だが、2位は母親、3位は父親で友人・知人は4位)。

(資料) 統計数理研究所（吉野諒三）「環太平洋価値観国際比較調査」（2005～2008年）

参考　父や母やきょうだいと重大事の相談をできるか（国際比較）



(資料) 同上



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著作は『統計データはおもしろい!』、『統計データはためになる!』(技術評論社)など。